

公益財団法人国際文化フォーラム
2021 年度 事業報告及び附属明細書



新型コロナウイルスの感染拡大は「コロナ禍」という言葉が定着するほど長期化するという事態となり、2021年度は事業の計画当初から対面型のプログラムは想定せず、全てオンライン型で実施するという異例のスタートとなりました。

オンライン型での事業展開をどう評価するかということは容易ではありませんが、対面かオンラインかの手法に関わらず、社会の中の多様性や複雑性、価値観の違いや自然環境の変化など、参加者がどのように捉えて体験・交流したかということについては、プログラム毎の成果発表で語られた参加者の実感に見出すことができます。オンラインでは時空を超えてアクセスできる容易さと、対面で集い空気感や皮膚感覚など五感を刺激するような体験ができないという制約があります。しかし、日韓や日露といった二国間の国際交流、パフォーマンス合宿での国内外の様々な言語・文化的背景をもつ人たちの交流のいずれの場合でも、SNS ツールなどを駆使してコミュニケーションを拡充し共同作業を可能にしていました。また、参加者それぞれが自分自身の内面と向き合い思考を展開しながら、アプリケーションなどを使いこなす大変さを乗り越えて、具体的なイメージをつなぎ合わせ、オンラインならではの感性も発揮している様子が伝わってきます。高校生年代の参加者が新たな文化を創造していく機会を提供できたのではないかと実感しております。

また、「テンダーさんのその辺のもので生きる」講座のシリーズでは、身の回りにあるモノや事柄の構造を学び、道具を使い材料を加工するという自分自身が習得可能な技術を体験することを通じて、社会の課題と自分のつながりを身近な事柄として捉えることができる機会を提供することができました。

新規に計画した「地球講座」では、地球を俯瞰的に見ながら「地球の目線」を育むプログラムとしてデジタル地球儀を活用し、球体の地球に映し出されるリアルタイムの気象状況や様々な事象が国境・地形を越えてつながっているということを実感する内容となり、当たり前のように耳にするグローバル化やSDGsなどのテーマについて捉えなおす視点を育てていく体験プログラムとして可能性を見出したところです。

全体を通じて、講師やファシリテーターなどの専門家との共同作業の中で培われたそれぞれのプログラムの核となる価値観も徐々に醸成されきているように思います。コロナ禍の収束を視野に対面型の復活とオンライン型プログラムの効果や可能性も踏まえ、TJFらしいプログラムの世界観を構想していくことが大きな課題だということ認識した1年間でした。

なお、事務局運営では、テレワークの運用で実績を評価していただき、公益財団法人東京しごと財団の「テレワーク・マスター企業支援奨励金」が支給されたことをご報告いたします。

2021 年度に実施した事業の一覧

- ア. 国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業
 - 1. 小中高校の教師研修
 - 2. 「学校のソトでうでだめし」プロジェクト
 - 3. インタラクティブ地球儀「Sphere」の地球講座
 - 4. 学生を対象としたインタビュープロジェクト・ときめき取材記
 - 5. ネットワーク構築と情報収集

- イ. ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業
 - 1. 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにつぼん」の運営
 - 2. ロシアの日本語教材制作
 - 3. ネットワーク構築と情報収集

- ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業
 - 1. 日韓の中高校生交流プログラム
 - 2. 日露の教師・生徒交流プログラム
 - 3. 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」
 - 4. ネットワーク構築と情報収集

- エ. 広報事業
 - 1. 事業報告書『CoReCa』の発行
 - 2. デジタル媒体を使った広報
 - 3. ネットワーク構築と情報収集

公1 我が国と諸外国の児童及び青少年を対象とした外国語教育、並びに多様な文化についての理解を促すとともに、教育及び文化の交流を推進する事業

予算額 103,978,911 円／実績額 101,771,498 円／収支差額 2,207,413 円

内、公益目的事業共通費用(給料手当、福利厚生費、消耗品費、賃借料など)

予算額 73,556,134 円／実績額 73,417,996 円／収支差額 138,138 円

ア：国内外の児童・青少年並びに教育関係者向けの研修、ワークショップ、セミナー、シンポジウム事業
 予算額 12,061,480 円／実績額 8,965,680 円／収支差額 3,095,800 円

事業区分 1. 小中高校の教師研修

事業名	学びの探究とデザイン					
収 支	予算額	465,180 円	実績額	0 円	収支差額	465,180 円
実績事由	近年、学校教育全体として探究学習を行うことが前提となり、研究活動が行われている。また、オンラインを通じて探究学習についてのセミナー等の機会も増加している。よって、TJF の役割は終えたと判断し、開催を計画していたワークショップは中止した。探究的な学び等、学校教育現場の状況把握のための情報収集は引き続き行う。					

事業区分 2. 「学校のソトでうでだめし」プロジェクト

事業名	1. テンダーさんの「その辺のもので生きる」オンライン講座 2. 「考える」を試みるワークショップ(中止)					
収 支	予算額	7,263,300 円	実績額	5,535,735 円	収支差額	1,727,565 円
実績事由	1 について: ・12 回実施予定で予算計上したが講師の都合により 7 回実施となった(減) ・臨時雇賃人の経費を当初 5 ヶ月分で計上したが、実際の業務内容にそって 8 ヶ月分に変更した(増) 2 について: ・講師の都合により中止した(減)					
事業概要	<実施目的> ・社会のなかの多様な生き方や価値観とその選択の余地を増やすこと。 ・コミュニティ、社会、世界の課題と自分とのつながりを実感とともに理解し、課題の解決に向けて考え、行動する人が増えること。 ・上記の問題や課題についてアクションを起こしたい人の助けとなる具体的な技術やものの見方・考え方、人との関わり方などを共有すること。					

<実施した内容> *以下は上記1について。上記2は未実施。

講師のテンダー氏が環境問題を、その背後にある構造を捉え、変化させることで実際に解決しようと収集、創造してきた具体的な技術や仕組みをワークショップ形式で共有した(2020年度に2回実施済み)。

●第3回 3D設計と3Dプリントを覚えて、必要なものを作ろう

無償版のソフトを使って3D設計の基本操作を学びながらコップを設計。3D設計・プリントは、自分が必要なものを必要な形状に必要な数だけ作ることを可能にするため金型で量産される製品を一方的に消費する側から主体的な作り手へと軸足を移し得ること、また、必要な場所でデータをダウンロード・プリントできるので石油を燃料とする物流と輸送を発生させずに済むことなどを共有。

●第4回 雨水タンクを作って、水を自給自足しよう

参加者が自宅で雨水を生活用水として利用するための雨水タンクを制作。その過程で、雨水が大気汚染、微生物、屋根・雨樋などさまざまな要因で汚染される仕組みや、安全性とは何かについて考察を深めた。

●第5回 システム思考を身につけて「しょうがない」を乗り越えろ！

暗黙の「社会の前提」に気づき、少ない力でそれを変える視点を身につける(レバレッジポイントを見つける)ための13のワークと17テーマのミニレクチャーを行った。

●第6回 その辺の草からロープを作ろう。ロープができれば暮らしが始まる

草などの自然繊維からロープ(縄)を作り、さらに足半(草履の一種)を編んだ。自然繊維の長さは有限だが、それを編むことにより無限の長さ・太さ・強さに変えられるということを体感する時間となった。また、暮らしに役立つロープワークを覚えながら、ロープワーク(結び)が摩擦を使った技術であることを考察し、さらにロープを使って物を移動させる実験を通して動滑車の原理について学び直した。

●特別編 その辺のもので生きるための心の作法 ～「正しさ」を越えて

専門家を特別講師に迎え「NVC(Non Violent Communication = 非暴力コミュニケーション)」のワークを通して、自他を理解し、自他の振る舞いの暴力性を見つめ、対等な関係性を築くとはどういうことか、そのために自分ほどのようなことばを用いるのかなどについて考察を行った。

●第7回 プラゴミを溶かして固めて、プラ製品を作ろう

プラスチックのさまざまな種類と見分け方、特性について、レクチャー、および安全性の高いポリプロピレンとポリエチレンを使ったものづくりの両方を通して学んだ。また、プラスチックのさまざまな添加剤が起こす問題の複雑さを例に、一人ひとりが自分で情報にアクセスしその情報を指針として何を選択するかが問われる時代だということが共有された。

●第8回 キッチンから鋳造を始めよう

台所用品や砂を使って錫を鋳造しておちょこを作り、古代から世界各地で行われてきた鋳造の仕組みや、錫という金属の特性など学んだ。あわせて、自分達の身のまわりは鋳造で作られたものが多くあるということ、また、金属加工も個人で可能だということも学んだ。

<事業計画から変更が起きたこと、およびその理由>

・講師の都合により、今年度12回実施予定を7回に変更した。残り5回は2022年度に実施する予定である。

	【計7回】第3回 4/4、第4回 6/6、第5回 8/1、第6回 10/3、特別編 11/28、第7回 12/26、第8回 2/27	第3回 21名、第4回 25名、第5回 35名、第6回 27名、特別編 62名、第7回 30名、第8回 21名 延べ 221人
実施形態	オンライン(講座実施 ZOOM、講座参加者用コミュニティ Discord)	
参加費等	第3回: 中高生 1000円、大学生 1000円、社会人 1500円／第4回: 中高生 無料、大学生 1000円、社会人 2000円／第5回: 中高生 無料、大学生 1000円、社会人 2000円／第6回: 中高生 1000円、大学生 1000円、社会人 1500円／特別編: 中高生 無料、大学生 1000円、社会人 2000円／第7回: 中高大学生 1000円、社会人 2000円／第8回: 中高大学生 1500円、社会人 3000円	
実施主体	TJF	
助成	なし	
協力	なし	

事業区分 3. インタラクティブ地球儀「Sphere」の地球講座						
事業名	地球講座「そうだ！地球に相談だ」					
収支	予算額	1,520,000円	実績額	849,827円	収支差額	670,173円
実績事由	企画制作を委託した特定非営利活動法人 Earth Literacy Program (以下、ELP)と事業のコンセプトワークを行い、今後の事業モデルを明確化、検証を行うためのパイロット版地球講座第1回を実施した。当初複数回実施することを想定していたため支出額が少なくなった。					
事業概要	<p><実施目的> 本事業は世界の青少年のグローバルに対する理解が深まり、地球における共在感(Online presence)と文脈への慮り(context awareness)を高め、利他的に連帯・共生するための地球大の関係力*に意識的になっている状態をめざす。</p> <p>*地球大の関係力:地球上の隣人(人類にかぎらない)と融通したり共有したり協力したりする関係性の力</p> <p><実施した内容> 講演とワークショップを実施した。</p> <p>【講演】 インタラクティブ地球儀「SPHERE」に搭載されているプログラム(移動する動物、台風・津波・海流の変化、地球温暖化シミュレーション、人口動態など)からグローバル(global)な事象が球体(globe、地球)上でおきていることを体感しながら学ぶ内容の講演を実施した。</p> <p>【ワークショップ】 講演を受けて、地球の課題は自分と不可分であると自覚の上、自分ごとと捉えて行動できるようになることをめざし、参加者間で地球に対する認識を分かち合いながら、ことばや絵、体などをつかって「私の地球」を自由に表現するワークショップを行った。</p> <p>講座はコロナ禍の状況と、今後オンライン上で効果的に地球講座を展開できる方法を模索するため、バーチャルオフィスツール「SpatialChat」を試験的に導入した。</p>					

	<p><事業計画から変更が起きたこと、およびその理由> 当初、対面での実施を想定していたが、新型コロナウイルス感染状況は収束の兆しが見えず、事業のコンセプトワークに時間をかけ、開催はオンラインで1回行うこととした。</p>	
	<p><成果> 参加者からは、「ひとつのところから地球全体にひろがるところを中心に考えた」、「Globe 上の責任は均等である」、「私たちが地球に及ぼしているいろんなことは循環している」などの発言があった。本事業が目的とする球体(globe)で見て思考することによって、私たちの日常を、地球の目線へと拡張し、理解することのきっかけを提供することができた。</p> <p>また、会場とした「SpatialChat」で、仮想空間上での円滑なコミュニケーション、同時通訳環境、講演者や発表者へのリアルタイムのフィードバックなど講座運営を改善するための知見を得た。</p>	
	<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 本事業の目的がより達成されるよう以下の課題に取り組みたい</p> <ol style="list-style-type: none"> 多様な国や地域からの参加者を募ること TJF がこれまでに積み上げたネットワークを通じて周知するとともに、地球科学等をテーマとするコミュニティへの働きかけなど行うことを検討中 講座を通じて講師と参加者、参加者間の対話の機会を増やすこと 参加者が講演内容に対する理解を深め、地球の課題を自分事として受けとめられるように、講師と参加者、または参加者間で対話する時間を設けることを検討する。 <p>特に参加者同士の対話では、おなじテーマでも様々な認識の仕方や考え方の違いがあることを共有し意見交換等が一層活発になるような流れをつくり、多様な他者とともに地球という文脈を共有する地球講座事業のコアコンテンツとして位置づけられるよう模索している。</p> <p>上を達成するために、多様な言語を背景とする参加者が自分なりの深堀りをしたり、講師および参加者間で対話し理解を深めたりすることができるよう通翻訳の態勢を整えることを検討する。</p>	
対 象	国内外の高校生	
講師等	講演：竹村眞一(ELP 代表、京都芸術大学教授)、ワークショップファシリテーター：井上靖隆(ELP スタッフ)	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	2022年2月28日(月) 計1回	計9名 日本高校生7名、韓国高校生2名
実施形態	オンライン	
参加費等	無料	
実施主体	TJF	
助成	無	
企画制作	特定非営利活動法人 Earth Literacy Program (ELP)	

事業区分 4. 学生を対象としたインタビュープロジェクト・ときめき取材記						
事業名	① 聞き書き体験ワークショップ ② 「ときめき取材記」実践校のサポート					
収 支	予算額	492,000 円	実績額	449,543 円	収支差額	42,457 円
実績事由	当初の計画通り、聞き書き体験ワークショップを実施するとともに、ときめき取材記プロジェクトに取り組む先生方のサポートを行った。					
事業概要	<実施目的> ① 聞き書き体験ワークショップ(教師向け) 聞き書きの体験を通じてプロセスで重要なことを体感することで、どうすれば学生の「聞く」「訊く」ことが深まり「書く」「表現する」ことにつながっていくのかを考え、実践につなげていってもらふことを目的とした。					
	② 「ときめき取材記」実践校のサポート 自分とは異なる考えを知り受け止めることを体験し、想像力を養うとともに、コミュニケーション力、発信力を育むことを目的としている。					
	<実施した内容> ① これまでにときめき取材記プロジェクト実践経験のある先生、ワークショップに参加経験のある先生を対象に、全3回のワークショップを実施。1回目は、誰に聞き書きをするのかを一人ひとりが決めたいうえで、参加者から投げかけられた疑問などに講師が回答する形で進められた。2回目は、インタビューの文字起こしをもとに原稿を作成する過程での課題や疑問について議論し、3回目は、事前に講師がコメントを書きこんだ参加者の原稿をもとに意見交換し、話を深めた。					
	② 前期に、秋田大学、東京女子大学、武蔵野美術大学、横浜国立大学、カンタベリー大学が、後期に法政大学がときめき取材記プロジェクトに取り組み、19本の記事が掲載された。					
<成果> 聞き書きやインタビューを深めるには、相手に真摯に向き合うことが必要であり、そのためには事前の準備と相手へのリスペクトが必要なこと、さらに互いの覚悟があって初めて聞き手と相手が「物語」を紡げること、さらに相手を立体的に描くための表現方法について考え、講師の数多い経験を聞くとともにみんなで議論したことで、聞き書きやインタビューそのものに対して実感を伴う深い理解につながった。 WS後のアンケートで、多くの参加者からあがっていたように、「聞き書きの意義、本質、作業する上で大切なこと、たくさんのことを学び」、このことは「授業をする上で必ず役立つ」といった実感を多くの参加者が得たことは大きな成果だった。						
<課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 来年度以降、新たに取り組む人が増えていくような仕組みづくりや、学生がひとりの人の語りに真摯に耳を傾け、「対話」し、それを表現するというときめき取材記プロジェクトのそれぞれのプロセスで得られる学びが深まるように、実践者同士の情報交換をより活発にしていけることが重要である。これまでは実践者だけのコミュニティはつくっていたが、実践していない人は入りにくいという課題があった。今後は、ときめき取材記プロジェクトにいつかは取り組みたい、興味があるという人も対象としたコミュニティをつくることで、参加者同士の意見交換がうまれる土台をつくっていく予定である。						

対 象	① これまでにときめきプロジェクトに取り組んだことのある教師、WS に参加経験のある教師 ② 大学等	
講師等	①講師:塩野米松(作家)	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	①第1回 2021年9月5日、第2回 12月19日、第3回 2022年3月26日 ②通年	①9名 ②6校
実施形態	オンライン(Zoom)	
参加費等	無料	
実施主体	TJF	
助成	無し	
協力	無し	

事業区分 5. ネットワーク構築と情報収集						
事業名	アの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
収 支	予算額	2,321,000 円	実績額	2,130,575 円	収支差額	190,425 円
実績事由	概ね計画通りの執行となったが、コロナ禍の影響もあって、全体の活動がやや縮小し、予算額を下回った。					
事業概要	アの事業に関連する学会、団体等への会費等支出に加え、情報収集と TJF 事業の広報に努めた。また、職員の学ぶ機会として、外部識者によるセミナー、映像・オンライン資料による学習の機会を設けた。課題図書を取り上げた読書会は規模を縮小して継続した。					

イ:ガイドライン・教材・視聴覚資料・授業案の開発や提供事業
 予算額 1,650,300 円／実績額 1,453,631 円／収支差額 196,669 円

事業区分 1. 日本の文化と人びと紹介サイト「くりっくにっぽん」の運営

事業名	① メールマガジン CNN(くりっくにっぽん)の配信 ② オンラインイベント「オンライン CNN ことばの楽しさにふれる」を開催					
収 支	予算額	205,300 円	実績額	217,065 円	収支差額	△11,765 円
実績事由	メールマガジン CNN(くりっくにっぽん)の定期配信を 2021 年度に終了するに際して、8 月に実施したオンライン CNN の事前会合が想定よりも多くなったため、予算額を上回った。					
事業概要	<p><実施目的> 多様で流動的ないまの日本を人にフォーカスして発信することで、文化の多様性や重層性、流動性をみる視点を広く共有する。</p> <p><実施した内容> ① メールマガジン CNN を 2015 年 12 月に創刊し、「くりっくにっぽん」の広報とそのコンテンツの幅広い活用をめざし、1 ヶ月に 1～2 回配信してきた。この数年は「ときめき取材記」のコンテンツを活用した学習活動アイデアを紹介した。また新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の折には、臨時増刊号を配信し、オーストラリア、韓国、アメリカなどの教師から寄せられたオンライン授業への対応の様子を紹介するとともに、オンライン授業で活用できる素材や学習活動案を提供した。今年 6 月に、63 号をもって定期配信を終了した。</p> ② CNN の定期配信終了のしめくくりとして、世界各地の日本語教師を対象に、オンライン CNN「ことばの楽しさにふれる」を実施した。「オノマトペ」を大きなテーマに据え、第 1 部では、「オノマトペ」の歴史や日常生活でどのように取り込まれているのかなどについてのレクチャーと、オノマトペで作られた詩「おと」(工藤直子)を使った授業実践例の紹介を行った。第 2 部では、グループに分かれ、オノマトペで詩をつくった後に、「教師としてキラキラ、わくわく、ドキドキしたとき/するとき」をディスカッションし、「教師だからこそ得られる喜びは～～～～」の文章を完成させてもらい、みんなでシェアした。 <p><成果> オンライン CNN の実施により、これまでのおもに英語圏の CNN 読者だけでなく、世界各地の日本語教育関係者にも参加してもらい、くりっくにっぽんや CNN でめざしてきたことやアーカイブ記事について知ってもらう機会となった。さらに財団メルマガ「わやわや」を案内したことで、新たな登録につながった。 アジア、ヨーロッパ、北米、オセアニアなどからの参加があり、他地域の先生と初めて話したという方々も多くいた。国や地域を越え、教師の喜びについて語り、日々の忙しきで忘れがちな「ことばの楽しさ」にふれたりしたことで、ことばの教師としての意義や魅力を改めて認識し、パワーとエネルギーをもらった、という声が多く上がった。</p> <p>【参加者の詳細】 11 カ国から 56 名の参加に加えて、ソウルで同時間に実施していた JTA(日本語教師ネットワーク)セミナーの参加者が視聴した。JTA はくりっくにっぽんの協力団体としてウェブサイト TJF コーナーを設けくりっくにっぽんのコンテンツと授業案を掲載。</p>					

	<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 今までつながってきた、あるいは今回オンライン CNN でつながった先生方とゆるやかにつながっていくために、「ときめき取材記」「くりっくにっぽん」のコンテンツを整理し、日本語教育、日本文化理解等を促進する現場で活用してもらえるように積極的に周知(メールを送るなど)をしていきたい。</p>	
対 象	① おもに英語圏の小中高校の日本語教師 ② 各国の日本語教師	
講師等	① 協力: 西村パーク葉子(元ニューサウスウェールズ教育地域社会省中等教育部アジア言語学習推進プログラム支援オフィサー) ② スピーカー: 西村パーク葉子、ニコルス潤子(Sydney Japanese International School 教師)、スペシャルゲスト: 出口裕一(St. Joseph's Primary School 教師)	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	① 2021年6月に配信 ② 2021年8月に実施	① 約800人 ② 56人
実施形態	① メール ② Zoom	
参加費等	① ②ともに無料	
実施主体	TJF	

事業区分 2. ロシアの日本語教材制作						
事業名	ロシアの初中等向け日本語教材制作					
収 支	予算額	135,000 円	実績額	46,716 円	収支差額	88,284 円
実績事由	教材制作のために絵本を活用する計画で、当初、参加高校生に1冊ずつ、同時に各参加校に10冊ずつ寄贈する予定だったが、実際には絵本の在庫が大変少なく、必要部数の入手ができず、予定より冊数を減らして、参加校のみに寄贈したことで、予算額を下回った。					
事業概要	<p><実施目的></p> <p>① 交流に根差した言語・文化学習の教材の形として「絵本」に着目し、その教材化の可能性について「日露高校生パフォーマンス交流」という場を通じて検証することを目的とした。</p> <p>② TJF が開発した交流プログラムの題材に「絵本」を活用し、各学校の日露言語学習クラスでも再現してもらい、フィードバックを得て、教材開発に生かすことをめざした。</p>					
	<p><実施した内容></p> <p>①日露2言語で出版されている日本発とロシア発の絵本をそれぞれ1冊(『100万回生きたねこ』(講談社)、『ワニになにながおこったか』(偕成社))を活用するため、ロシアの生徒の所属校に2種類の絵本の日本語版を各1冊寄贈した。</p> <p>②教材として「絵本」が有効であるかを調べるために、「日露高校生パフォーマンス交流」(2021/12月-2022/1月実施)で使用した。(ロシア側参加高校生の所属校に寄贈した。)絵本の読解を深めるために事前に問を用意し、参加者に回答してもらった後、交流本番ではその回答をもとにディスカッションを行ってもらった。さらにそのディスカッションをもとに、絵本のストーリーをアレンジしオリジナルの戯曲を作成、動画作品をつくってもらった。</p>					

	<p><事業計画から変更が起きたこと、およびその理由> 当初、交流で使った絵本をロシアの参加高校生の学校に寄贈し、その学校の日本語教師に授業や交流学习で使ってもらったうえでフィードバックを得て、次の教材作成に進む予定だった。しかしながら、コロナ禍やロシアによるウクライナ侵攻などの要因により計画したことを行うことができなかった。</p>	
	<p><成果> ①「日露高校生パフォーマンス交流」では、日露の高校生はどちらの絵本からも深いメッセージを受け取った。特に、「愛」「自由」「生きること」「異なるものへの寛容さ」など、地域を越えた普遍的なテーマについて深く考えることとなった。そして、そこから想像を膨らませ、意見を出し合い、自分たちのメッセージをのせたオリジナル動画作品を作成した。これらのことから、教材として「絵本」の有効性が検証できたことは大きな成果だった。</p>	
	<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> 絵本の効果を検証できたが、市販の絵本を活用する際、著作権者から使用許可を得ることの難しさ、活用上の制限の多さもわかった。そのため、今後は絵本の形式を採った交流学习用教材を独自で開発する必要性が明らかになった。</p>	
対 象	日本とロシアにおいて互いのことばを学ぶ高校生とその在籍学校	
講師等	なし	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	②2021年10～11月	②ロシアの8校(サンクトペテルブルク、モスクワ、ノボシビルスク、ハバロフスク、イルクーツク、アングアルスク、サハリン)
実施形態	郵送	
参加費等	無料	
実施主体	TJF	
助成	なし	
協力	なし	

事業区分 3. ネットワークの構築と情報収集						
事業名	イの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
収 支	予算額	1,310,000 円	実績額	1,189,850 円	収支差額	120,150 円
実績事由	概ね計画通りの執行となったが、コロナ禍の影響もあって、全体の活動がやや縮小し、予算額を下回った。					
事業概要	イの事業に関連する団体等への会費支出に加え、情報収集とTJF事業の広報に努めた。					

ウ. 互いのことばを学ぶ国内外の児童及び青少年並びに教育関係者の交流事業
 予算額 9,236,460 円 / 実績額 10,291,363 円 / 収支差額 △1,054,903 円

事業区分 1. 日韓の中高校生交流プログラム

事業名	互いのことばを学ぶ中高生交流プログラム 2021 ダンスダンスダンス Online					
収 支	予算額	1,665,860 円	実績額	1,880,809 円	収支差額	△214,949 円
実績事由	<p>下記の事由により予算を超過した。</p> <p>① あらたに発生した案件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ポスター制作および募集要項等書類発送委託費 ・増員したスタッフの謝金および機器の賃貸費 <p>② 支出額が増額した案件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・韓国での機器賃貸料：レンタル会社の機器利用単価が予定よりも高くなった。 ・韓国での宅配費：トラブルによる機器の回収と再送が発生し宅配費が倍になった。 <p>③ 共催団体の拠出金負担額の変更</p> <ul style="list-style-type: none"> ・共催団体の秀林文化財団拠出金が、2021 年度より韓国国内で発生した経費に限ることとなり、日本側での経費分担ができなくなった。 					
事業概要	<p><実施目的></p> <p>本事業では、日本、韓国で互いのことばを学ぶ中高生が、K-POP という身近で共通の関心のもと互いのことばで対話しながら、以下3つのきっかけを得ることをめざした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) さまざまな価値観をもったひとたちがいることを知り、一緒になにかをすることに興味・関心が広がっている 2) 多様性が集団(社会)の力になると信じられるようになっている 3) 隣語(自分にとっての新しいことば)を学びたくなっている <p><実施した内容></p> <p>日本で韓国語を学ぶ中高生と韓国で日本語を学ぶ高校生が日韓混成の四つのチームに分かれてダンス動画作品を制作、発表するオンラインプログラム。VRを活用し、相手がすぐそばにいるかのような空間で自然に発話が促されるよう場を整えた。発表会は、チームの自己紹介、ダンス動画作品、プロダンサーからのインタビューという流れで進み、見学者が4チームの中から、最も魅力を感じたチームに投票して優勝チームを決めた。</p> <p><成果></p> <p>昨年度の経験を踏まえ、オンラインでいかに参加者間の関係を構築する交流の場をつくるかについて知見が積み上げられた。今年度得られた知見は大きく次の2点。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 副言語、非言語のいずれでもコミュニケーションできる場やツールを用意することで、多様なコミュニケーションスタイルをもつひとたちのつながりを実現することができた。 2. 発表にむけた活動に終始せず、発表とは離れた話題で雑談したり自由に交流したりできる余白の時間を別に設けることで、参加者間の関係性が高まり、目的が十全に達成された。 <p>事業を実施した10年を通して、日韓の中高校生にとって身近な K-POP ダンスをテーマに、多様性が集団の力になると信じられるような体験を提供できた。ダンスは人のコラボレーションの始まりといわれるが、多様な他者をつなぐ優れたテーマのひとつだった。</p>					
対 象	日本で韓国語を学ぶ中高生と韓国で日本語を学ぶ中高生					

講師等	小峰智(メディアディレクター)、星音(バーチャル Youtuber)、齋藤宣世(ダンサー)、ソングヨン(ダンサー)	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	第1回 2021年7月25日 第2回 2021年8月1日 第3回 2021年8月5日 第4回 2021年8月8日 第5回 2021年8月11日 第6回 2021年8月15日 計6回 ※7/25は、通信機器の接続テスト	計18名 ・韓国語を学ぶ日本の中高生(青森、東京、神奈川県、埼玉、千葉、大阪、京都府、岡山県、長崎県より9名) ・日本語を学ぶ韓国の高校生(江原道、京畿道、ソウル市、仁川市、忠清北道、忠清南道より9名) *韓国で中学生の応募無し
実施形態	オンライン(バーチャルリアリティ SNS/VRchat、テレビ会議システム/Zoom)	
参加費等	無料	
実施主体	秀林文化財団、TJF	
助成	日韓文化交流基金	
協力	実施:秀林外語専門学校、韓国日本語教育研究会 協力:高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク 後援:国際交流基金ソウル日本文化センター	

事業区分 2. 日露の教師・生徒交流プログラム						
事業名	1.日露教師交流会 2.日露高校生パフォーマンス交流					
収支	予算額	1,213,400 円	実績額	1,870,630 円	収支差額	△657,230 円
実績事由	12月～1月にかけて実施したパフォーマンス交流の日程が5日から6日に一日増えたことで、ファシリテーターの資料作成・プログラム開発・作品指導・管理謝金、通訳+コーディネーター、サポーター謝金などが発生したため、予算額を上回った。					
事業概要	<p><実施目的></p> 1. 日露の学校間でオンライン交流を実践している先行事例を紹介し、参加教師間の情報交換、意見交換を行うとともに、新たな交流希望校をつなげること、さらに、TJF主催の「日露高校生パフォーマンス交流」について説明を行い、協力をお願いすることを目的とした。 2. 日露二言語で出版されている絵本を題材にして、日露の高校生が協力して絵本をアレンジしたオリジナルのパフォーマンス作品をつくることを通じて、ことばや文化について学びあい、コミュニケーション力と創造力、表現力を高めながら、交流を深めることを目的とした。					

	<p><実施した内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1.オンラインで交流を実施している4組が実践報告を行った。その後、2グループに分かれ、報告者以外で実践経験のある人に発表してもらい、情報を共有した。また、交流会では12～1月に実施する日露高校生パフォーマンス交流についても説明した。 2.絵本『100万回生きたねこ』（作・絵:佐野洋子、講談社）と『ワニになにがおこったか』（作:M・マスクビナー、絵:V・オリシヴァング、偕成社）を使って、日露の高校生が交流した。交流が始まる前に、参加者は各自で課題の絵本を読み、内容理解、独自の解釈、受け取ったメッセージなどについての質問に答えてもらうことにより、絵本についての理解を深め、本番では日露高校生はZoom画面やSNSを通して対話を重ね、互いの考えや価値観を共有した。そのうえで絵本をアレンジして創った自分たちの物語を、演技や美術演出を用いて表現し、動画作品に仕上げて発表した。 <p><事業計画から変更が起きたこと、およびその理由></p> <p>計画の当初は、絵本のオリジナルストーリーをそのまま、演劇や美術・造形的な手法で日露の高校生に表現してもらうことを想定したが、プログラム化を進める中で、著作権の使用制限上、オリジナルストーリーの再現について許可が難しいということで、絵本をアレンジして新しいストーリーを創作することに方針転換し、それに必要な日数に変更した。</p> <p><成果></p> <p>メッセージ性があり、普遍的なテーマを提示する名作絵本を用いることで、日露高校生の思考や感性が刺激され、活発な意見交換を可能にし、対話の深まりと発想の広がりの方両方において効果を発揮することができた。原作のアダプテーション方法や戯曲の作り方、動画作品にする際の表現手法や編集技術について、それらの分野の専門家であるフェシリテーターにレクチャーやサポートをしてもらえたことで、各チームともに言語の壁や文化の差異を越えて作品を完成させ、発表会で上映した。発表会には国内外から60名超の方々の参加があり高い評価を受けた。</p> <p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)></p> <p>はじめて絵本を用いた交流活動を実施してみて、市販の絵本を活用するうえで著作権上の制限は想定以上に大きく、今回開発したプログラムや手法を今後ウェブサイトに掲載して広めたり、日露の教育現場で採用してもらったりするのが難しいことが分かった。この課題を解決する有効的な方法の一つとして、今後の交流活動と言語教育現場の双方で使える独自の絵本教材を開発することとした。</p>
対 象	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本の高校ロシア語教師、ロシアの初中等日本語教師、国際交流基金からロシア各地に派遣する日本語専門家、日露学校間交流、高校生交流に関心を持つ教育関係者 2. 日本でロシア語を学んでいる高校生(独学者含む)、ロシアで日本語を学んでいる高校生(15～19歳) 各10名程度

講師等	<p>1. <発表者></p> <p>1 組め: 釧路南高等学校(鈴木桃子)とノボシビルスク 130 番リツェイ(イリーナ・クズメンコ)</p> <p>2 組め: 札幌国際情報高校(依田幸子)とサンクトペテルブルク 583 番学校(マリア・サヴァロヴァ)、ノボシビルスク工科大学付属 IT リツェイ(オリガ・モスクヴィナ)</p> <p>3 組め: ウラジオストク 51 番学校(ダリア・オニシチ)</p> <p>4 組め: カリタス女子中高高等学校(櫻木千尋、松本浩史)とハバロフスク 5 番ギムナジア(アレクサンドラ・マフラコヴァ)</p> <p><通訳者></p> <p>エカテリーナ・リャーボヴァ 翻訳家 オクサーナ・ボンダレンコ ロシア語教師</p> <p>2. <ファシリテーター></p> <p>柏木俊彦 演出家・俳優 水内貴英 美術家 山泉貴弘 映像ディレクター</p> <p><通訳></p> <p>エカテリーナ・リャーボヴァ</p> <p><サポーター></p> <p>スミルノフ・デニス(国立研究大学高等経済学院 5 年生)、エリナ・セルゲイヴナ(国立研究大学高等経済学院 5 年生)、オリガ・セルゲイヴナ(国立研究大学高等経済学院 5 年生)、山下愛連、エフゲーニ・ザッツェーヴァ(通訳)</p>	
実施・参加実績	<p>実施日</p> <p>1. 2021 年 9 月 19 日(日)15:00~17:30 (日本時間)</p> <p>2. 2021 年 12 月 11 日、12 日、25 日、26 日、2022 年 1 月 9 日、23 日、計 6 日</p>	<p>参加人数</p> <p>1. 日露の教師、国際交流基金のロシア担当者 3 名を含め 42 名</p> <p>2. ロシアの高校生 10 名、日本の高校生 9 名、計 19 名</p>
実施形態	<p>1. オンライン</p> <p>2. オンライン</p>	
参加費等	1、2 ともに無料	
実施主体	TJF	
助成	なし	
協力	なし	

事業区分 3. 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」						
事業名	1 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」2021 夏プログラム 2 多言語・多文化交流「パフォーマンス合宿」2022 春プログラム					
収 支	予算額	4,417,200 円	実績額	4,776,315 円	収支差額	△359,115
実績事由	2020 年 3～4 月に実施したプログラムについて、2020 年度予算に計上していたが、実際には 4 月に発生した謝金を 2021 年度の予算から支払ったため、不足が生じた。					
事業概要	<p><実施目的> 一人ひとりの個性を尊重し、多様性に富み、創造性を育む社会環境の醸成をめざし、多様なことばと文化につながりや興味・関心を持つ高校生年代を対象に交流の機会を提供することを目的とする。</p> <p><実施した内容> 夏合宿と春合宿の2回実施した。</p> <p>① 夏合宿 音楽、ダンス、美術、映像を掛けあわせて一人ひとりの「マイキーワード」を表現した作品と、4チームに分かれ、チームメンバーが対話を通じて見つけた共通テーマを表現した動画作品を作ることを目指して活動した。 チーム毎に制作した作品の中には自作の「歌」を作品に入れたチームもあった。</p> <p>② 春合宿 小さなステップを踏んで自己開示をしていく「I am from」という演劇プログラムを軸に据え、自分たちの思い出や経験、尊敬する人、これからの目標などを素材にポエムを作り、各自のポエムを持ち寄って1本の脚本に織り込み、そうしてできたチームの「物語」を様々な手法で表現し、そこに自分たちの声を重ねて作った音楽と、一人ひとりのポーズをつなげた創作ダンスも加えて、各チームとも 8 分を超える動画作品に仕上げた。交流の時間をより多く確保するため、6 回活動のうちの4回をいつもの半日プログラムから一日プログラムに変更した。</p> <p><成果></p> <p>① 夏合宿 参加者の半数以上が海外及び海外ルーツで、オンラインによる交流の広がり可能性を大きく示すことができた。発表会見学者アンケートでは作品の完成度が高いという評価を得ている。また、参加者の振り返りを見学された方から、高校生たちの成長が見られる、ピンチに遭っても創意工夫で乗り越えたことに感動した、との声が寄せられた。 成果発表会当日の見学者は約 50 名を得た。</p> <p>② 春合宿 「I am from」という演劇プログラムを軸に据えたことで、個々の参加者の内なる声をスムーズに引き出し、互いをより深く知ることにつながった。それらの内なる声から1本の作品を創っていく過程でより共感や敬意が生まれ仲間としての絆を強めた。メンバー一人ひとりのかけがえのない「個」を混ぜ合わせて一人のキャラクターを創り出したチームもあった。「個」の中の多様性と同世代の「共有性」の両方が垣間見られる作品となった。発表会では国内外から 60 名超の見学者が参加し、3 チームごとの動画作品の上映と各作品のアフタートークを見ながら、zoom のチャットにたくさんの感動のメッセージと声援のことばが寄せられた。</p> <p>①②のどちらの合宿でも中間発表を行い、ファシリテーターや他チームからのフィードバックに時間をかけた。他チームの作品やフィードバックから刺激やヒントを受けたことで、発表会本番までのわずかな時間で作品が磨かれ、完成度を高めた。共創の力によるものであった。</p>					

	<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)></p> <p>参加者募集に関しては、毎回、定員割れを起こしている。原因の一つとして考えられるのは、オンラインという実施形態である。短期集中型の対面開催と異なって、オンラインではどうしても個人作業が増え、SNSを活用した意思疎通に時間がかかる。そのため、実施期間が1か月以上と長くなり、忙しい高校生にはハードルが高い。また、これまでもよく指摘されているWithコロナ時代の「オンライン疲れ」である。オンラインによる無料のプログラムが多発しているなか、創造性を求めるプログラムであることももう一つのハードルと考えられる。しかしオンラインだから参加できたという参加者も毎回一定数いる。</p> <p>今後、オンラインと対面の両方を企画し選択肢を増やしていく。より世界に開かれたオンラインプログラムとより地域に密着したプログラムを同時に企画・実施することで課題を解決し、目的を果たしていく。</p>	
対 象	<p>多様なことばと文化につながりや興味・関心を持つ日本と海外の高校生</p> <p>① 日本と海外の高校生</p> <p>② 日本国内在住の高校生</p>	
講師等	<p>① <ファシリテーター></p> <p>田畑真希 振付家・ダンサー</p> <p>棚川寛子 舞台音楽家</p> <p>水内貴英 美術家</p> <p>山泉貴弘 映像ディレクター</p> <p>発表会の配信支援 加藤アンナ(VR YouTuber)</p> <p>② <ファシリテーター></p> <p>柏木俊彦 演出家・俳優</p> <p>田畑真希 振付家・ダンサー</p> <p>森永明日夏 俳優・ティーチングアーティスト</p> <p>山泉貴弘 映像ディレクター</p> <p><VR等IT支援担当プログラムスタッフ></p> <p>加藤アンナ (VR YouTuber)</p>	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	<p>① 8/2、8/4、8/10、8/11、8/17、8/29の6回</p> <p>② 3/5、3/6、3/19、3/20、3/28、4/3の6回</p>	<p>① 15名(ほか高校生サポーター4名)</p> <p>② 13名(ほか高校生サポーター3名、大学生サポーター1名)</p>
実施形態	<p>オンライン(本番は zoom)、春の回は zoom+VR</p> <p>そのほか、随時 slack で意見交換し、無料編集アプリ各種を利用。データの共有と管理は Google drive と Dropbox を活用した</p>	
参加費等	無料	
実施主体	TJF	
助成	なし	
協力	なし	

事業区分 4. ネットワーク構築と情報収集						
事業名	ウの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
収 支	予算額	1,940,000 円	実績額	1,763,609 円	収支差額	176,391 円
実績事由	概ね計画通りの執行となったが、コロナ禍の影響もあって、全体の活動がやや縮小し、予算額を下回った。					
事業概要	ウの事業に関連する学習機会のための資料収集等、情報収集等と TJF 事業の広報に努めた。					

エ. 広報事業

予算額 7,474,537 円 / 実績額 7,642,828 円 / 収支差額 △168,291 円

事業区分 1. 事業報告書『CoReCa』の発行						
事業名	事業報告書『CoReCa』の作成					
収 支	予算額	4,585,960 円	実績額	4,876,095 円	収支差額	△290,135 円
実績事由	校正用のコピー代、送り状印刷経費、委託経費等が想定を上回った。					
事業概要	2020 年度に実施した事業の実績のレポート、財団の概要等を編集して発行した。					
対 象	TJF 理事、評議員、寄付者、事業協力者、事業参加者					
実 績	発行日			発行部数		
	2022 年 3 月			4,000 部(仕様:A4 変型、42 ページ)		
実施形態	冊子形式による発行、配布及び PDF 版のウェブサイト上での公開					

事業区分 2. デジタル媒体を使った広報						
事業名	1 メルマガ「わやわや」の配信 2 ウェブサイトの運営 3 TJF Facebook page の運営 4 IT 機器管理・各種アプリケーションの利用					
収 支	予算額	2,248,577 円	実績額	2,183,400 円	収支差額	65,177 円
実績事由	【わやわや】 読者プレゼント企画を年 2 回から 1 回(年始)に変更したことで、書籍の購入費及び送料が減少した。					
事業概要	<実施目的> ・事業報告を通じて TJF がめざしていることや考えていることを知ってもらう。 ・TJF 主催事業の参加者を募る。 ・TJF とのつながりを感じてもらう。					
	<実施した内容> 【わやわや】毎月 1 回の定期号・臨時増刊号 18 回を配信、クリック数の調査を実施 【ウェブサイト】お知らせ記事 28 本(事業の報告と募集)を掲載。ページの不具合補修 【Facebook】季節のカバー画像を更新 【IT 危機管理・各種アプリケーションの利用】 新電話システム用 iPhone を 1 台追加購入					
	<事業計画から変更が起きたこと、およびその理由(あれば)> 【わやわや】 年2回企画しているプレゼント企画を新春プレゼントの一回に集約した。					

	<p><成果> 【わやわや】クリック数の調査を実施し、タイトルや配信時間・曜日によってクリック数が変わることが分かった。さらに配信3日後はクリック数が伸びないことも判明。募集をかける際は臨時増刊号を積極的に活用するほか、タイトルもその都度変えて配信を行うなどの工夫につながった。</p>	
	<p><課題、および、今後課題にどのように取り組むか(改善していくか)> Instagramをはじめとした他の媒体もより有効な活用が必要である。より有効な発信方法を考えて、デジタル広報の運営体制を立て直していく。</p>	
対 象	1 事業協力者、参加者をはじめ TJF に関心をもっている方々	
実施・参加実績	実施日	参加人数
	①毎月第3水曜日、臨時増刊号8回(2021年4月2回、6月、7月、8月、9月各1回)	①登録者約2,400名
実施形態	①メール ②ウェブサイト	

事業区分 3. ネットワーク構築と情報収集						
事業名	エの事業に関するネットワーク構築と情報収集のための活動					
収 支	予算額	640,000 円	実績額	583,333 円	収支差額	56,667 円
実績事由	概ね計画通りの執行となったが、コロナ禍の影響もあって、全体の活動がやや縮小し、予算額を下回った。					
事業概要	エの事業に関連する情報収集並びに調査研究を行った。					